次のページ

まちの話題

総合文化祭

第37回富士見町総合文化祭が11月1日から3日まで町民センターで行われました。今年は晴天に恵まれ、大勢の方に来ていただきました。中でも作品発表の一角に機織り機や粘土などを持ち込み、見るだけでなく体験できるコーナーがあり、大勢の方が参加していました。

11月2日は富士見グリーンカルチャーセンターで芸能音楽祭が行われました。午前中は「音楽の部」、午後は「芸能の部」に分かれ、450人が参加し、日頃の練習の成果を発表していました。

粘土の会による陶芸教室
参加者はなれない手つきで湯飲み茶わんを作っていました

芸術の秋を感じさせる作品が勢ぞろいしました

昔なつかしい童謡を歌う、こまくさの集いの皆さん

町公民館主催で行った絵手紙講座での作品が展示されました。改めて手作りのよさをかんじました

ふるさとのみなさんへ 東都高原富士見会だより

水野六夫
千葉県茂原市
（横吹出身）

ふるさとを偲ぶ小庭

外房の此の地に縁があって移り住んで37年、我が家の庭先に植えた錦木、今年は見事な程に実を付けている。その実が裂けて、橙紅色の種子を現し、葉も徐々に紅葉が進み、庭一番の秋を誇っているようだ。

小さな庭の片隅に造った二坪程の池の周りや庭に配してある石も、実家の前を流れる武智川から拾い集めてきたもので、故郷を思い起す一つである。

数年前の秋、実家近くの土手に紫色の小花が多数集って、球形に開いた可愛らしい草花を見つけた。名も知らないこの花を大事に育てて、今では数も増えて故郷の花の代表格になっている。やっとこの花の名が「山らっきょう」だとわかった。

時を同じくして採ってきた小さな木通（あけび）の木も大きく育ち、沢山の花が付き、実に成るのを期待したところ、今年初めて2個熟しとても感動した。果肉の割れた中の種子を口に含み、懐かしい甘さに、子供の頃が脳裏に浮んだ。

先日、富士見から移植し根付いている草木はどの位あるか数えたところ、20種程あった。今後も千葉の気候に合いそうな草木を増やし、ふるさとを偲べる庭に出来ればと思っている。

年を重ねるにつけ、強い郷愁に駆られ、帰省の度に四方の山々を眺めていると津軽民謡の歌詞が浮んでくる。「…冬は真白く、春青く、夏は墨染、秋錦アー衣がえする鮮やかさ」。まさに富士見から見る風景そのものだと、自然の豊かな富士見に生まれ育ったことを誇りに思う。

町では富士見の美しい風景を守り、育てることを目標に町づくりをする計画があるそうなので、是非実行されることを願っている。

（次ページに続く）